26　天保三年花供養

底本　糸井文庫本
校異　石川歴史博物館本

花供養

（題簽　表紙）

（表紙見返し）

手向の花の集れることいかでか
かぞへ尽さん。今や咲たつ花のみ
にはあらず。こと葉の花のさま／〻＼
なるを像前にさゝげ、雅筵を
まうけ、頓てさくら木にものし、
席上につらなる人々へおくらるれば、
其枝葉天が下にひろごり、三尺の

童子もけふを知るはまことに
めでたき花の供養にぞありける
天保三年壬辰晩春　湖東　里童
里
童

花供養集

献立は梅よりかろき桜かな　麦洋
帰るふりなき門先の鶴　千崖
くんでおく蛇籠に夏のいそがれて　梅通
ことづけ物を胴忘れする　並隆
町並に少しひつこむ林あと　榛堂
荷鞍おろせば馬の嘶く　喜楓
用ひとつあすへ投やる暮の月　杜鷲
ちよつと焚てもしれる新わら　芹舎

雁風呂の相伴多き船の中　斗丈
　頻に咽のかはく若而　其成
灯心も先からさきのおろし売　杜蓼
　繕ひもなき岐阜のあいやけ　楓下
立ながら逮夜の布施を包まるゝ　田美
　今騒だはたしかあちむら　芳英
雪起し南でなるは珍らしく　梅價
　吹革埃りの尻さましけり　十海
事箸の無益に長き月夜さし　月峰

後の雛の捌をかゝさぬ　露光
鳴もせぬ河鹿を飼に骨を折　蘿閑
膝の処のはげし立つけ　南渓
板敷へ吹こむ花も夥し　夙也
古巣に土をはこぶ乙鳥　岱美
都成りに坐頭の登る別霜　林曹
潜上いふてまづい物食ふ　初六
雪隠と井戸の間が小一町　真斎
授戒のうちも絶ぬ見廻人　北洋

返事かく顔を鹿の子に覗れて　百池
　襦袢の糊のたらぬ着ごゝろ　若雅
大部屋の盛相番が早まはり　一風
　木曽で覚し疝気筋ばる　南峨
右百員一順下略

天保三辰年
　花供養会
散花にまじるや軒のこぼれ炭　よう女
　苧かせの糊のくさき暖か　蒼虬

雨まへの雉子は洲先へ走り出て　並隆

小薮の中をとりやらす土　貨僕

ひつくるめ一荷にたらぬ古道具　烏都雄

松葉の★も長うこたえる　楚雀

わやくやと内輪ばかりの月見舟　兆三

盆からもまだ蚊柱がたつ　呉明

蔵あとはといと藜のから太り　芹舎

年たけるまで娘はなさぬ　克雄

縁のある最上の扶持も断りて　月峰

（★火偏に唐）

いつでも釣に出る岩はな　乙雅
前山は小松ばかりのすつくりと　俗美
箸を休めて足袋脱に立　月坡
吹革ふく隣のおともはし近き　夙也
最はや石部の馬を追出す　南渓
ひとあられ来さうな空の月細く　鵞雪
祝儀鱈うる店のちいさき　杜蓼
寺もどる子にもつれなう取合て　百池
けふは片づく転び木の枝　乙龍

鍋釜も損料がりの出開帳　榛堂
灰におとしてみえぬ豆板　初六
山ひとつ無理越したる日の永さ　几乙
つゝじしごきし手のほめく也　翁杖
初鮎に糠味噌汁をくひ覚え　草烏
ちよつと小声できかす新内　杜鷲
紐ばかり安房にながき銭財布　喜楓
榎が伐て清水よくなる　とせ女
献立は入院過ても張ておき　夜白

あと戻りして足の砂ふく　若雅
籾蔵の先から犬に吼つかれ　梅價
何処とも鴨の渡り少なき　蘿閑
紙漉の無病な顔に月さして　十丈
干せのもどりし干瓢の屑　其独
からくんで野分をうける風呂のやね　素山
二三日禰宜も留主とみえけり　言来
きつてある楠は次第に匂ひ立　遊斉
飼鳥やらす冬のとりつき　道沖

沖なりを聞も日暮のいそがしく　鴻洲
うり場の酒を難いふてのむ　其成
かぎざけも今に直らぬ薄羽織　丈翠
用がなくても宮を見まはる　酔露

右一順下略

ナニハ　鵞雪

おそければおそい花ある都かな　庵女
ひや／＼となるまで花の木陰哉　橘子
菜の花に魚荷の走る径かな

心得て居ても気疎し雉子の声　菓翁
青柳も居眠る影も動きけり　松隣
山里や落花にまはる一二丁　自楽
鶯の落す糞まで聞れけり　蟻兄
参宮から食覚えたる田螺哉　福米
人騒ぐ側遠退てはつ桜　松子
水ありとみえて光るや遠柳　月桂
船頭の舟にも居らず春の月　眉岳
軽う来て鶯竹をたはめけり　慮中

鳴雉子にたぶらかさるゝ日和哉　祇白

梅に月亭主たゞ今戻りけり　イタミ　退歩

ひそやかに物ほどこすや初桜　陽樹

吉野ざくら本坊にて

見おろしつみあげつ花の中舎り　ナニハ　幽草

信貴山にて

見過して花ちらしたきよくめ哉　伊丹　草方

飛出て牛にかゝるゝかはづかな　太乙

いふ事のなさにとし問ふ子日哉　鳴々

かいわいに人なし花のちる真午時　仝
始末してけふも折けり梅の花　兵庫
酔て折梅七八分なくしけり　墨巣
花に夜を掛てあぶなき天気哉　印南
明家をかるや花屋の梅時分　万雅
花の夜や鬼にもあはず往もどり　止鳥
組合ふて雛買ふてやる長屋哉　北窠
ほんのりと花は木の間に夜明けり　徐全
土器の落る処や花のちる　梅洲
　　百尺

菜の花やあらぬ処にこぼれ咲　月仏
花ひと木持て寝られぬ月夜哉　漆水
梅咲てそこら和らぐ畠かな　南喬

俳諧歌仙行

近よればまばらになりぬ里の梅　蒼虬
　東風に北気のまじる日の入　自楽
嵩になる干鱈のそりをへしつけて　虬
　鼻にかゝつた皆のものいひ　楽

牛の子のひよこ／／通る宵の月　虬
　大体にとる新綿の塵　楽
盆をしに戻りし尼を留置て　虬
　しれた風呂日を触るかいわい　楽
昼も夜も脱だ所見ぬ革袴　虬
　よい媒を又もことわり　楽
長梅雨に膝つき合す台司の間　虬
　おほきな菓子の残る高坏　楽
明てある空にも諏訪の月冴て　虬

拳をつかむ鷹のいちもつ　楽
髪剃て居ても日雇を廻す也　虬
出代るまではちよつと親分　楽
何所もかも味噌摺立る花盛り　虬
往来の間は霞む社家町　楽
地乗だけ覚えた馬に駈を追ひ　仝
真ンの庭から子供等がすき　虬
八方の灯も初夜近くちろ／＼と　楽
義理なき恋をふいと仕かゝる　虬

風邪引たふりして衾打かぶり　楽
　獺をねらうてから騒ぎする　虬
枳殻から右手はすべて寺領にて　楽
　米搗形りのうとき立つけ　虬
蚋まけについじだらくな朝手水　楽
　鎮守て庭の気味わるうなる　虬
下戸衆はぼつ／＼帰る月の雨　楽
　穢多も砧を人並にうつ　虬
秋寒にかゝつて纏もすき上り　楽

かし家一軒土間にして置　虬
とろ／＼と阿膠をけふも焚通　楽
御茶師はついと取引をする　虬
けつくして花の遅速も手柄あり　楽
地虫の這ふてこそばゆき足　虬

右

いく先に妻こしらえて湯やの猫　イセ津　団釈
散てから深山になる桜かな　麦村
中の洲へこして囉ふて摘若な哉　市場　いはほ

海の果ありや木の芽に来る小鳥　高座原　座麓
鶯や隣へ出ばる枝になく　四疋田　宇栗
なに事も花に捨ばやけふ一ト日　仝　栢梁
うしろより月は出たり花の山　サイキ　滄洲
汐風にかまはぬ梅のにほひ哉　井内　可遊
山里は宵から寝たり春の風　江月
観音へ駕すゝめけり春の雨　相可　梅峨
花の山笠はあみだにかぶりけり　三疋田　汲古
乙鳥の落すや壁の枯ひらぎ

行雲のとりつく花の木の間哉　山田　蘭舟
静なる日をおちそめる椿哉　杉堂
茶を水にするや鶯きたる度　潮花
一月はちるにもかゝるつばき哉　尾張ナゴヤ　沙鷗
草臥た足でまたぐや凧の糸　而后
鶯にそゝなかされて二三町　秋蘆
向ひ合柳かれこれとゞきけり　梅裡
吹わりに飛されもせぬ胡蝶哉　秀外
伸るほどかげにもならぬ柳哉　宮
岩クラ　旭湖

木ぶりには過た花もつ椿かな　沓カケ　宜彦
菜種咲畠やさしや嵯峨の奥　三河　卓池
行灯をせがむ子供や松の内　赤守
燕やなま兵法のかるはづみ　三岳
草臥た夜も余所へ出る睦月哉　蓬宇
貸駕籠のけふも出尽す椿かな　青可
山の雪解るにしては水清し　流芝
囀るは鳥屋の鶯よ梅のはな　朱芳
咲時の来て咲にけり薮の梅　梅老

土鳩の考へて居る接穂かな　氷角
鋸の目をする門のかすみ哉　待亮
とりとめぬ宵の咄しや春の雪　梅岳
屋敷衆の遠慮して摘若菜哉　稲居
万歳を一番に越す渡しかな　松東
なの花や荷は連て行子のきげん　一応
是ほどの川を只越す彼岸哉　塞馬
送り荷の鶯啼やひる支度　南畝
柳まだ寒し田尻の囲ひ鮒　波文

山焼や下りるばかりの間の宿　沙芹
敷ものゝよごるゝ日なり春の風　雷石
椽先や眠れ／＼と蝶の飛ぶ　守中
爰をれといふ節のつく蕨哉　素芯
持ものゝかくも殖けり梅の花　大梅
道ばたの田舎木ぶりや梅の花　丁知
鶯や羽の雪ふるひ／＼なく　麻交
山吹やうつら／＼と咲おはる　有月
枝村へけぶりつゞくや夕柳　幻芝

甲斐
伊豆網代
エド

かりて来た膳しらべるや梅の花　万頃
残る花ちり立際もなかりけり　得蕪
鶯やひと薮先にまた一羽　抱儀
押合ふて鴨のなくすや春寒み　茶静
屋根ありく猫にもかゝる霞哉　小圃
初桜日かげになつてみゆる也　禾葉
こゝろよき人をこのみて年男　畝古
鶯や盃事のそばでなく　八朶
うぐひすをのけてみたれば枯木也　何丸

ちつて来る花をうけるや檜笠　上総勝浦町　一晁

花守やしかる替りの咳払ひ　下総左原　桐雨

在家とはみえぬ椿の大構へ　比古

花の木をふやして見せる入日哉　小蓑

宵月や往に椿を折た処　斗囿

田の水のすみ口つくや啼雲雀　植房　梢山

三吟之俳諧

鳥渡した煙りを立て小松曳　蒼虬

吹れて雉子の歩行日の筋　烏都雄

舟へ出す鹿尾草に垣を転されて　榛堂

どれもはしたになりし酒樽　虬

照る月にひとつで済すたばこ盆　雄

ことしの作はすべて倍まし　堂

すばしりの溝まで這入る秋の汐　虬

泊る手はづの違ふ播磨路　雄

眼の星のとれし娘の仕合せさ　堂

いつの際でも絶ぬ飯食ひ　虬

縄網を素屋根の上へ引廻し　雄
　むしやくしや合歓の生る芥場　堂
入梅晴の月に又ふく不二南　虬
　郷人足の鼻へ洩る声　雄
香水の筒をぶら／＼首にかけ　堂
　釣針すげる明り邪魔する　虬
全うに留主もしられぬ花の比　雄
　笊に霞む独活や人参　堂
出代の小宿を頼む御室わき　虬

ぬれ手に付し水引の箔　雄

仮橋もかなりにかゝる紋日前　堂

いくつか年のしれぬ花売　虬

肩あてのあとだけ縞の兀残り　雄

履もの焦す餅搗の暮　堂

めき／＼と仕あげられたる木津の医者　虬

植木畠へ岨がくへこむ　雄

古萱をなぶりたてして困る也　堂

大屋の葬の幡が出かゝる　虬

朝月にまだ稲妻の止きらず　雄
躍のあとの柿の食さし　堂
麁朶たけばひんすに成し下り簗　虬
跟の腫に足を引ずる　雄
店替の当座はものを置忘れ　堂
箸から先へ付る膳立　雄
花盛り取次するにかゝりはて　虬
鳥は残らず巣放れの声　堂

右　歌仙行

菜の花をめぐるや水の跡もどり　蒼虬
何処も簀を作る暖か　四明
蚕飼ふ家は八ツ茶の始りて　榛堂
額の煤を撫てひろげる　虬
錫挽の給銀わたる月の秋　明
出さかり時のしれぬなめ茸　堂
紅葉から着る十徳も拵らへて　虬
身柱(チリケ)すえれば丁稚しくつく　明
足跡の埃りにみゆる階子段　堂

遊び工合の違ふ墨染　虹

手拭を縄により／＼立別れ　明

ひとかたまりに鴨の毛が散　堂

荷問屋の股火もゆるす暮の月　虹

隙さへあればなぶる肬目（ウヲノメ）　明

内証で流るゝ質を買て置　堂

かゝえて出てはかし傘を干す　虹

山吹も喜撰もきらず花盛り　明

噂ばかりでしらぬ積塔　堂

若鮎も窓からつれる屋敷裏　虹
朝めし前にかもへ往て来る　明
弟の世話で一枚着替へけり　堂
はつか鼠がごもくからわく　虹
建付も合ぬ本陣の勝手向　明
丹波太郎のじり／＼とへる　堂
うつすりと加減の薬利そうに　虹
嫁の気立を誉る内外　明
日参もけふで上りの鬼子母神　堂

ついと蔀の下りしから凍　虬

遣ふだけ菜をぬいて来る有明に　明堂

せつかく飼ふた鶉斃けり　虬

丁嚀に盆を勤る小道具屋　明堂

ちよろ／＼引にひきしおし水　虬

つゝぱりをして見ぐるしき廊下口　堂

花につぶりのとゞく陸尺　虬

ろく／＼に砂もふかせぬ蜆汁　明堂

雉子をきくには至極よい処　堂

右　歌仙行

小祠をおけばをらぬぞ梅の花　江州大ツ　舒六
町中にからすも下りて春の雪　九皐
もの言ぬものにはあかず山桜　蕙布
行過る顔して折るや寺の梅　はる岑
如月や舟に乗たき夕ごゝろ　米友
最一駅こす気になりて啼蛙　坂本　蔦雨
はる雨に夜店の海老の動きけり　金蚯
買物を窓からするや雨の花　カタヽ　世岐

雁鴨の夜を引替て春の月　成章
暮際の桜に残す曇りかな　文葉
我あとへ流れて出るや春の水　蕪城
其中に月の影ある桜かな　禾郷
それほどの世帯が花にたつ烟　斗行
俎板をつかふ日多し梅の花　一居
陽炎やうちにはおらぬ鶏の声　釣湖
觜太の人呼ぶ花の木の間哉　巣夫
柳よりうへに手の鳴座敷かな　半来

大溝

凍どけやぶらりと下る梅の縄　音羽　田美
よく窓の煤けた家や梅の花　辻沢　来志
梅ちりて雨のたまるや屋敷尻　鹿志
寝のびする猫の背にちる桜かな　舟木　仙景
一日は曲突もかるや花盛り　磯海
船頭の手ばなかけ行柳かな　一駒
初桜田楽くしも青かりし　万木　北馬
ちる時に人のよくみる桜かな　亀碩
みな梅の匂ひなりけり夜の曇　五十川　節外

きれ凧に苦なく越けり丸木橋　前野　秋杵
用のある顔でつと行花見かな　川島　松月
籠提て余所の鶯聞にけり　隅井
草はまだしめりもなくて梅の花　綾彦
おだやかに日の入みるや春の山　秋斎
ちよつと裾からげて朝の桜かな　紫藤
水のみに下りた所のさくら哉　桃屋
日の暮て人声ちらす桜かな　玉山
長遊びすれば桜にちられけり　嗽石

風呂好のさがし歩行や夜の柳　海津　呂乙
引ずるもしらで提行柳かな　土山　虚白
羽子つくや人のをしゆる水溜り　石鼓
掃よせの砂に肥たりつく／＼し　梅亭
水かけてやるに逃るや雨蛙　月扃
神の灯の二処三処夕柳　大の　月坡
陽炎や鶏かきさがし／＼　仁正寺　一嘯
大鼾聞える梅の朝戸哉　ヒノ　士明
白水の不断ながるゝ柳かな　和月

梅咲て富士遠のくや日本橋　葛巻　里童
炭火ふくほどは風あり春の月　町家　芋丈
古葉など取ればそこにも春の水　女　桐寄
やつと手のとゞけばゆれる柳哉　七里　巳兆
辻ごとにまはつてあるや春の水　八マン　太令
入口で尻をすえるや花の山　四明
花に行道やしぶとい物囉ひ　夜外
灯ともして初午土産ひろげけり　寛楊
落着に吐いきつきけり花の中　桃谷

爛鍋の尻干花のあした哉　仙李
夜にいりて水音高し花の山　蝸堂
きのふから踏かためるや梅の下　嘉涼
順寛なけぶり立けり春の山　白朶
ちる花や一曇りある嵐山　白哉
赤門の遠くみえけり花曇り　梅三
更しとは誰もおもはず夜の花　蘭月
初花や庭の掃除も日一ばい　和翠
春寒や酒盛りみゆる土間の家　芦洲

内中がみな客になる雛かな　南峨

戸をたてゝ夫婦出て行霞哉　浅小井　烏都雄

ありあかし置て寝にけり花の宿　一峰

見過した日もなく花の散にけり　江頭　花君

折まがる高椽寒し花の暮　ミノ神戸　楚雀

ぬけ道のとりつきにある椿哉　杉月

下駄ならす日和となりぬ梅花　大垣　梅翁

見てくらす人とはなりぬ花盛り　信州善光寺　武日

野も山も何やらゆかし朧月　上清内路村　素風

ひとひらの柴山みえて春の水　上野マヤハシ　嘯洞

佐渡山をみて来て遊ぶ小蝶哉　倉カノ　器水

行春の空にむけたる鏡かな　高サキ　之厚

きさらぎの中の十日や侘ごゝろ　福島　沙来

十団子に少しかゝりぬ夕霞　上毛　分尾

降かゝる雨も霞んで仕舞けり　奥州田名部　帆富

ちよつぽりと置たやうなり福寿草　南部　一毛

我こゝろ子供にかへる桜かな　脇ノ沢　貨泉

黄も白も秋にまかせん菊の苗　仝　一遊

馬の子を誉られにけり桃の花　安積山下　可都美
ぬるみしも人にくれけり庵の水　会津　一木
万歳にもどりの遅き使かな　魚守
畑打の伸するかたや筑波やま　静花改め　茂荊
しら魚や解んとおもふ手のぬくみ　香雪
月雪の紙衣やぬれて梅の花　南五ノ戸　青玗
家／＼の門から出るや春の風　班鳧
大鳥の飛空ひくし弥生尽　墨鵞
啼ひばり少しの雲にかくれけり　馬亭

宵月足もとくらき桜かな　車丈
冷やかに下行水や木の芽立　理和
塀越の松の黒さよ朧月　蕉秀
かも川の水澄きるや御忌の鐘　廊哉
長閑さや舟の中なる雑菜屑　樗叟
若草や歩むにたらぬ庭ながら　子岬
水やにも頓て啼出す蛙かな　露桂
牛飼に大枝囉ふ桃の花　文喬
夜のくわつと明たやう也花の山　同八ノ戸　五楽

雲動くともみえぬ日や揚雲雀　居眠
飛虫の三ツ四ツみえて梨子の花　一影
花鳥や人は器用に生れたき　志厚
八重咲やちるも間のある花盛り　常丸
此谷が一ヶ村なり桃のはな　杉田　英泉
駒鳥のめつたに啼や秋葉山　五陵
初午や野へ行ぬけの大工町　二本松　文骨
三日月の不足を啼か江の蛙　秋田ノ扇田　玉扇
夜は草の上から明る弥生かな　歌長

わたくしに山の名呼て花の宿　出羽米沢　以文
さして来し留主の戸明る桜かな　若州西津　万里
囉ふ梅まかされて手のまよひけり　逸中更　巣雪
鶯の休みて居るや二つまで　女　宇都み
人事は一日いはぬさくらかな　巴遊
朝寝する家きれいなり春の雪　笠下
なの花や出張て見ゆる請酒屋　之道
鶯や氷の上に泥のさす　小浜　大郭
揚きつた凧にかゝるや峰の雲　椎山

漕舟のじり／／遠き霞かな　可楽
灯ともせば一段高し梅の花　友圃
出て聞ば豆腐挽なり朧月　壺中
陽炎やものにこゝろの定まらず　意水
梅咲やしら波たてゝ渡る馬　年風
三足めに飛や蛙の歩行下手　舞杖
窓の梅きせるをあげて折る指図　掉江
水荷ふ僧のめだつや花の影　素洞
向ふから梅は匂ふにまはり道　俤布

越前丸岡

カヾ金沢

折る音に莟だ花もひらきけり　逸亀
寝にほこる人ぞにくけれ梅に月　扇路
灯ともして桜みる夜のくらさ哉　馬丈
春の雨濁りもさゝぬながれかな　桂洲
若草や思ひのまゝに日の当る　可杏
折たれば葉がちにみゆる椿哉　柳更
廻り道するや家中の遅ざくら　素文
落凧の詮義して居る小道哉　茂竹
遊ぶ子の鈴がなる也ちる桜　白二

少年

何ぞげに折れば重たき桜哉　立介
菜の花や下り口しれぬ長縄手　完史
鶯や手傘すぼめる路次の口　節斎
若草や家のうしろはきつね穴　因来
折て来て道／＼へらす桜かな　商斉
僧脇の前をつと行つばめ哉　秋平
舟ひきの昼も邪魔がる柳哉　禾暁
袖引て盃さすもさくらかな　知雪
のんびりとしたる花見の莚哉　風戸

馳走する袂に雛のこけ玉ふ　和多
をりをしみしては桜を廻りけり　可陸
寺へ来て帯しめ直す桜かな　太甫
肩に銭のせて見て居る桜哉　其麦
夕月や桜の中の虻の声　一洞
門口に水もはしるや梅の花　東堤
隣にも客あるふりのさくら哉　三志
おもふよりもろくをれたる柳哉　一雄
菜の花や眼先にありて遠き宮　淇亭

雪窟

梅あり／＼見ながら暮る野間哉　晴霞
寄かゝる柱も花のぬくみかな　居童
土とりの来てはさはがす柳かな　歩兵
少しづゝ夢見残して春くれぬ　可丈
大名と見こむ薺の拍子哉　如翠
まんぞくに膳にすはらぬ花見哉　淇翠
橋へ来て又見かえるや田の柳　鴎池
松明を消した跡あり山つゝじ　竹雄
鑓の来て左右へそれる乙鳥哉　去年

夕桜膝にたまりしたばこの粉　此水
ぬぎ捨たものゝ下より啼蛙　満美
家二つもたれ合けり花の中　蘭窓
だまつては人の通らぬ桜かな　蘭枝
座に付て草臥の出る桜かな　蘭笑
折たればみな持たがる桜かな　超翠
七種やはやし仕舞へば供揃ひ　破窓
水音をあらしと聞や花の奥　疎蓼
つく枝にちからのみゆるさくら哉　素桂

花の山暮る支度はなかりけり　文草
道端に居る花見のむしろ哉　宇牧
ゆとりある空やひるから昼の月　黄年
雨に菰くれる家あり山ざくら　彦崎

宮ノ腰

鶯や煙まばらなひと在所　霞堤
折てのちあつかひにくき桜かな　春涯
雲雀啼追分泊りつれもなし　凡調
椽先へ来ては余寒のすゞめ哉　鶯柯
うつかりと一日たてぬ春の雨　卵龍

鶯は何食て青し雪の山　巨山
一村は持たぬ家なき桃の花　巨泉
眼のだるき折ふし花の散にけり　亀巣
鉄砲の音はやみけりはるの雨　桃蹊
風くせのなりに余寒の並木哉　桃園
手とゞきに来て別れけり蝶二つ　花卿
木の枝をくゞりては打畠かな　璃山
田の松の月になりても霞けり　草紫
薮一日掃て聞出す蛙かな　呉柳

小マツ

川留の幕打町や飛ぶ燕　里魴
梅折につとふみたればから俵　山中　青介
曳杖の拳は寒し梅の花　串　一行
骨折のみゆるひばりや風の空　東桃
里ありとしれる山路のつばめ哉　大正寺　北園
凧おろすむかふにたつや番所の灯　石羊
水の礼惣／＼いふや花もどり　葭流
薮入の出来ごゝろなり墓参り　丹嶺
見こませる宿屋の奥の桜哉　呼亭

清水や椽の下から出るつばめ　豊収
御返事の出ぬ退屈や赤つばき　可考
一処まぎれ道あり山ざくら　裡竹
紙すきの眠りさますや啼雲雀　白令
降ほどの雨のしみこむ柳哉　魯石
あり処とへば地尻の柳かな　蜂舎
四五人に着せる夜着あり花の宿　木雄

歌仙表

落椿吹たつ木の葉おさえけり　素芯
　来てはつばめのよごす傘釘　葭流
暮遅く留守居仕事に紬染て　呼亭
　むつくり高き土糞のあと　蒼虬
月の比寒いけしきはねからなく　十丈
　舟でをとりの下ならしする　千崖
　　下略

火を焚て居るうち暮し桜哉　ノトヽキ　李丘
荒坂やされどさい〳〵蝶の来る　梅明

花くれて恋しき里の火影哉　子梅
霞よりはるか上なり初瀬の鐘　杏園
どの家も留主なり背戸は梅花　花渓
湖に出崎もありてむめの花　二芳
月の夜は梅で持けり荒畠　梅雪
苫舟に居ればちりけり梅の雪　春鯉
宵月はちと高過る柳かな　思文
分別もなく離れけり月と梅　梅嶺
誉られて籠にすくなき薺哉　稚龍

カサシ
ヲキノ谷
川尻
丶出村

若草に駕のあとある小坂哉　中シマ
摘ためて何度か捨し菫草　冠李
追やれば直に行なり春の雁　九皐
隣から折か手寄りそ梅の花　北世
鶯の啼や袴をたゝむとき　其丈
くるゝ日を草にもよらず啼雲雀　ニシキ川
舟つけば松葉のかゝる余寒哉　ハナミ
鍬持てそろ／＼出たり梅の花　ウ川
折る枝は花のすくなき桜かな　翠屋

つまんではゆきゝする也落椿　二ノ宮　冬秀
春の夜や風呂なき処に一舎り　七尾　楽斉
ものほしに休で来たる乙鳥哉　竹塢
つうと見て座を定めけり花の中　ゆみ子
裏屋中うつとしといふ柳哉　六皎
朝からの淋しさぬけて雉子の声　越中富山　沙外
いにしまに眼印立る蕗の薹　黄居
鶯や傘さすはたまの事　尺莆
長者跡柳おほきう成にけり　葦村

庵の蛙掃やる咎もなかりけり　凡丈
貝売を重ねて置や花の宿　木司
梅にとゞく階子も持ぬ在所哉　松方
鶯鳴や出張た山の片日南　如寥
足ばやになりたり花のみえてから　あふむ
梅が香や人声多き作事小屋　福光　幹古
三日月のはじめは寒し春の水　魚津　孤山
猿曳の扇子を置や膝の上　乙雄
うつすりと富士もみゆるや春月　写水

一仕舞膳かたづけて夕ざくら　宇玄
ひは／＼とした橋渡る花見哉　麦車
方丈に手のなる音やちる椿　東川
ありたけの長閑さみえて夕柳　双水
脇やらもみずに椿を折にけり　保久亭
淡雪や鳴かずに歩行雁四五羽　可暁
二夕駅も馬のつかえるふぢの花　其巌
片隅に寒さ残りてはるの山　真弓
一世帯してうらやまし桜かげ　路三

高岡　和泉　新川　吉久
マシマ　放生津　福町

汐先を引くり返る乙鳥かな　今石動　放古
夜の戸や咄すを聞ば花の事　越後長岡在　石嶺
梅をるやうしろへ廻す小脇ざし　見付　万里
出居一間明わたしけり花見客　北洋
うつむけば膝にちりくる桜かな　加茂　車十
舟ひきの過れば落る椿かな　雄柳
日の入し後もなつかし春の海　養素
花の後気らくになりぬ夜のけしき　村松　北坡
花を出る童のもつやひねり文　逸丸

春の水落合ふまでの行方哉　市猿
夜に入て鐘つく寺のさくら哉　蓬亭
和らかに日のさす花の木下かな　月斎

糸井川

綻る花に言葉のはなもがな　三甫
海少し木の間にみゆる桜かな　宜雨
寝がへれば呼起されて藤の花　其誠
永かれと宵からおもふ柳の日　士宝
春雨や畳歩行て草臥る　敬甫
田の人の雨ともいはぬ春辺哉　宜春

ふところへ綰ねていれし柳哉　尚古
花の宿揃はぬ膳が馳走かな　曳尾
花盛り鞍なし馬をかりに来る　守白
鳥もみな觜あらひけり春の水　甫十
かる程の笠に紐なし花の雨　野楊
出代や支度してからうら隣　保解
花多くあるが中にも桜かな　阿斎
花の香にちいさき旅の硯哉　深尾
下馬先は人もたゞさず雨の花　蕉夢

上十日市
高田
丹バ亀山
古人
篠村

ながあめになるや花見の内料理　保ヅ　梅庵
人影もみえずけぶるや花の中　烏舟
日雇等のはや仕舞たる柳哉　半山
花を見て居るや背おひは負たなり　山本　其朴
花の中卒都婆かたげて通りけり　仝
横槌の転行先や猫の恋　馬路　茶腸
山道や腰のばす時初ざくら　臥雲
鶯の見合ふ庭樹や朝日さす　須知　俵瓜
里なれて鶯ひと日ふた日哉　福住　知足

土砂掻ばあがれと暮ぬ柳かな　笹山
奥庭は女まかせや遅ざくら　風処
来るとはやせはし乙鳥と水車　冠雪
霞まれて十分舟に寝たりけり　田城
夢捨に出て青柳に吹れけり　兎秋
親乙鳥あれもこつちで生れた子　観之
十分の花に一舟おくれけり　亀麿
鶯の啼ても広し殿の留主　黒井　露光
逗留の客の落合ふ二月かな　大山　武陵
丹后田辺　似藻

辞退なく飯食て去る和布哉　葉久藻
灯ともせば夜も桜のちりにけり　一葉
大枝となるや畳に置さくら　雪薺
雉子啼や矢をつく様に下り舟　北亭
つれて来て置ば三つにもなる蛙　双
伐るを見て貰ひ人たかる柳哉　蕉山
戸あくれば桜吹こむ御堂かな　白水
鶯の友よびするや外家中　柳圃
明後日と延す紺屋の春日かな　桃之

孕んだとみゆるや枝を折鴉　素梅
傘の下出代前のはなしかな　蕪良
さして来し留主の戸明る桜哉　万籟
菜の花や松と厠は背な合せ　夷白
山寺や只の椿に朝日さす　瓜涼
毛氈にすりこ木こかす花見哉　無角
留守事に大そう散し桜かな　竹公
八重桜三日月たけて静なり　也風流
寺の庭すぐにつゝじの山つゞき　一山

宮ヅ

居りなれたしる田ふまえて春の雁　東翠
月のいろ灯の色すける桜かな　守平
すべつたるあたりから啼蛙かな　松月
旅人や柳みによる横小路　君友
障るものなくて柳の大ゆふれ　北柚
柳折るとてすら／＼と上りけり　里橋
飛こんだ鴉するどき桜かな　松露
小戻てみる飛越のすみれかな　遠花
親しきは雪と桜のあいだ哉　玉芝

四辻

中浜

河辺

★丐（★凹の字の中央に縦線）

並松の揃ふて侘し春の月　駄覩
七種や親子そろへる雪あかり　其夕
梅咲やむかい隣の朝寝ずき　庵月
ちらかつて川の流るゝ汐干哉　金英
汲あとを覗て居るや春の水　青芝
薄暮て真白うなるさくらかな　峰山　白砂
鶯に旦那の袖をひく家来　黄貫
咲たより落て幅ある椿かな　但馬出石　扇海
万歳の撫て通るや子のあたま

苗代やいくつも仕切田一枚　竹裏
きれ凧の帆柱に来てかゝりけり　古岸
鳴鹿の角も落けり伊都岐島　霞城
いかめしき寝覚や庵の花の陰　金月
笠提て立人もあり春の月　地原　広居
川へだつ隣ありけりはるの月　一之
柳見て居れば来るぞよ渡し守　村岡　柳眠
初蛙火を打ほどのおもしろみ　魯兮
鈴音に鶯馴る野宮かな　壺亭

花の雲神と並びてかり寝哉　日カ丁　楽嵩
花の影明てある座の長刀　浜坂　羽長
散る梅や食ては吐出す池の鮒　轟　道雄
踏で行水に移るや春の月　月亭
春の夜やもどりにはなき田の小橋　伯州米子　草台
親村へ行も春辺や二日がけ　淀江　雪江改　有隣
田の上におどろく夜あり梅の花　今ヅ邑　とみ女
春の夜や傘かりによる畑の家　雲州母里　亮曠
隣から霞むといふやこちからも　完道　春濤

鶯やすみ／〻＼寒き寺の内　呉堂
立ながら仏を拝む花見哉　石州矢上
こけなりに菫摘ばや日のぬくさ　梨雪
花の座につくより眠りつゞけけり　芦青
夜の明てちる花水をへだてけり　曾夢
遠声の尾につく蛙ひとつ哉　播州姫路
青柳や人にからるゝ日和下駄　茶田
青柳の桂にそひぬはねつるべ　布蘭
山の家にひとり帰るも花盛り　古瀬

修
魯狂
守一

蛤に雀のたかる余寒かな　古川　蘭陵
雉子啼や日和かたまる茶木畑　芳洲
鹿の角片づら落て日ぐれけり　円山
青柳や花の恨みもありさうに　女
若草や高みに家の建古し　村子
梢から来るや夕べの雉子の声　左栞
苗代やふた輪三輪鳶の移り行　ヒヱ　桃月
紙鳶あげて朔日遊ぶ屋敷哉　古谷
さむしろに片尻かけて花見哉　新宮　鼓吹
ウサ崎　五芳

椽先へ火の出してある春辺哉　中尾　千尋
手伝ふて小僧にをらす柳哉　魚崎　節之
勝手には人の居らぬぞはつ桜　網干　以文
梅が香や子供の多ひ一軒家　ヒメヂ其暁改　陸草
水のみに出て間もおかず山の雉子　ツマ井　六英
黄昏を鐘がしらせる桜哉　但州天王　好耕
水ほしき二日酔なりちる椿　備後宮内　蕉雨
菫摘でおさなごゝろに戻りけり　トモ　応雅
傘の古骨買ひや春寒し　仝

手にとれば目印もあり薺屑　青塢
雲雀啼空や曲突の燃しさり　斗斎
持かえてくゞり戸出るや梅の花　雪頂
水際のぬれて目にたつ霞かな　田影
いたゞいて肩に上るや梅が下　玉相
鶯の初音に覚し朝の月　文路
草摘や我もわすれし拾ひ杖　不朴
うぐひすの啼直しけりぬかり道　白尓
家かげやたしなみの菜も花になる　三蔦

アキ広島

今着し船の碇かおぼろ月　周防室ツ　雪香
鶯にゆひもさゝれぬあした哉　白松　英芝
波をり／＼岸にとゞくや初霞　鼓吹
松毬にとり付て居る蛙かな　上ノ関　栗堂
傘さいて通れば落る椿かな　史鳴
元日や着ぶくれて居る船の者　長門下ノ関　岑麿
陽炎や手ついでに掃棚の煤　益三
流れから尋入たるさくら哉　淡路須本　方壺
蒲公英にふるふて立や小風呂敷　アハ　青荷

呉られた薺ののしや臼の上　鸞巣
我猫に遠い処で逢にけり　友樵
きれ凧の侘言にまで歩行けり　向栄
ひと町の裏は一つで桃の花　梅守
小豆にる火のとぼしさや朧月　サヌキ河内　其岳
散花や日暮て戻る庵の犬　玉瀾
風の手はふせぐ山あり花の宿　稼耕
酔ざめに見て居る窓の柳哉　高松　三千麿
三日月を見に出てかきぬ蕗の薹　可都彦

夕蛙啼や乞食のちよろ／＼火　由喜彦
木挽等も手前仕事や梅の花　李上
菜の花のへばり付けり肴籠　啄月
落る時鯲のはねるつばき哉　今是
万歳にさはがぬ鶴の歩行哉　木長
梅を持家の並ぶや江の向ひ　杏堂
湯治するつれ定るや梅の花　一斧
あたらしき戸の明たてや春月　芳三
鶯の得意まはるや薮つゞき　夢蝶

白鳥
和田浜
丸亀

すさまじや加茂川越る猫の妻　茂椎
鶯やちからもいれぬ鍬遣ひ　一行
乙鳥の並んで覗くたらいかな　木兄
星かくすほどの曇りや啼蛙　桑戸
猫追ふて出る戸口や春の月　蕪九
雨もちて明るみのつく桜かな　円外
雉子啼や吸付て出るたばこの火　柏年
蝶の舞とて明はなす障子哉　鸞雅
梅を折はづみに越る小川哉　鸞斎

イヨ大洲

引汐のひくともみせず夕霞　泉齢
春雨になりきる暮のからす哉　蘿山
大そうな大工つかひ梅の花　蒼頂
落着に枕さがすや雨の藤　稼暁
名処としらで畑打男かな　宇和島　素亭
ひまな日の出来れば花の散にけり　呉天
袖にたまる風さへもなし絵踏の日　大井　烏朝
山鳥の尾を引ずるや雨のはな　樋ノ口　井峨
朧夜の明た証拠や鳩の声　高郡　郊馬

付て来て花の事いふ乞食哉　川ノ江　二島
捻きりし蕗の匂ひや朧月　吉田　鶴雄
嵩よりは幅に流れて春の水　石漁
持て居る桜にも日は暮にけり　蟾居
春雨や泡のながるゝ芦の中　筑前　士焉
壁塗た人の来て見る柳かな　月平
一日を花に名残の灯しかな　甫六
あと智恵になりけり梅の手折様　雨堂
掃よせてみれば嵩ある椿かな　素萍

小机もかゝえ出したる桜かな　亀笑
鍋ひとつ抱えてまはる桜かな　嵐堯
永き日や幾度か掃庵の砂　呉蔦
置直す机に蝶のねぶりかな　柏翠
鳥の巣や塵ひと筋の初より　文雄
枝折戸も明てあるなり散桜　呂舟
薮入の見あげて居るや庭の松　桃下
苗代や幣耕しに来る小鳥　鴉郷
春の水渡つただけは濁りけり　漁洋

流れ出て月も広がる春の水　樹幸
門並のみやげにたらぬ蕨かな　香輔
薮入の隣まで来て暮にけり　石居
苗代の日和つゞくや水の泡　代酔
鰐口のせはしき音や花盛り　鵞友
塀ごしに紅梅囉ふ小枝かな　若拙
跡じさりして詠めけり庵の花　自考
のし付し梅のつかえる戸口哉　立沙
花菫けふも泊りの近い駕籠　樵山

洗足も温泉で仕舞けり花の宿　臥山
春雨の中や風呂屋の行通ひ　石岱
初花やひと朝濁る小石川　松二
傘さして万歳通る日暮哉　青鵞
梅ちるや水の流るゝ垣の外　竹舎
月さすや明捨てある花の門　南礎
声ばかり野に暮残る雲雀哉　一予
摘かけて傘たゝむ若菜哉　惜花
元日も鹿のあとある畠哉　宇逸

女

梅ちるや人影移るぬりだらひ　和風
坂下りて衣紋作るや梅の花　野竹
初花や筏の迫る山の間　五岳
足もとに海苔かき寄る日暮哉　遅柳
恋猫や暁寒き窓あかり　蕪園
ひと雨の森に移るやおぼろ月　柴扉
持かえる杖やそこらに啼雲雀　砂北
見処のなきほど花の盛り哉　松鼠
二三本松の目に立さくら哉　尺歩

在京

真盛りになるや桜のひとけしき　蛙籟
小家毎に火をたく花の真ひる哉　斗丈
小ひねりな料理の沙汰も二月哉　嗒然
水筋は曇り持けり夜の花　鶴史
月のさす門は別して花のちる　幻化
飛込だまゝ花を出す山鴉　文老
春の日や愚痴文盲に炭せつき　木父
宵月やおくれてひとり花戻り　巴山
近よれば扇も交るさくら哉　可椎

秋月

筑後クルメ　文枝改
豊前小倉

長閑さや四方の遠目の松と家　村雨
輪火縄のけぶる処や花すみれ　四友
舟からも来て穴一や柳かげ　豊村
開帳の花より高し大卒都婆　里山
初花の淋しうなくて静なり　松風
存外な処から出てはつ蛙　木斉
焚飯の泡吹おとや雉子の声　砂水
行春ををしむや鍬の横なぐり　懸壺
初東風や塩魚つかふ磯の家　鷺風

添田
豊後日出

是きりで寒さも去るねはん哉　　日田　黙斎
ちりやうに気を持花や池の上　　雨芳
飯櫃も日当に出たり梅の花　　肥前神代　素羅
来た道を覚へても居ず菫つみ　　千丈
行春の誰気にも合ふ料理哉　　亀詠
彼岸とて店先へ出る朝茶哉　　涛堂
苗代や怪我した足で見て廻る　　鷺洲
片里の凧並びたり海の上　　冬耕
淡雪や羽音のふとき鳥の行　　和雲

桃咲やくさき鯨を売に来る　柳甫
山ごえに帰依寺はあり春の月　霞林
遠歩行して摘まける若菜哉　悠々
行春の松に立たる箒かな　其映
波のよるけしきを霞む淡路島　雪峨
ちる花や春の名残も扇だけ　達夫
鶯にさはる音あるすだれ哉　砂楽
暦には寒き日もあり梅の花　都蓼
青柳に雨もおぼろもかゝる空　東六

大村
長サキ
田代曙庵社中
五百衛改

梅の花雀追ふにも気草臥　羽玉
山風や桜吹こむ笠のうち　如雪
嬉しさの短き花の蒲団哉　楽之
陽炎を掻集めたる松毬(チヽリ)哉　巣旭
紅梅に明石の朝日をがみけり　流水
あら磯や月は山端におぼろなる　百枝女
春雨や須磨に寝し夜の思はるゝ　芝月女
美しき水の音ありおぼろ月　花夕女
朝ぼらけ花に老木はなかりけり　希石

奈良漬にみな集まるや花の雨　一桂
永き日や戸にもたれたる馬の顔　梅調
仰向ば寒き雲あり梅のはな　雪笠
火を打て夜明をまつや初ざくら　白扇
初花や渡れば沈む小板ばし　曳尾
けふも又聞て戻るや花のかね　南丸
水汲の正月ぶりや高足駄　厚薄
駒鳥啼や夕栄へもなき小篠原　習之
雉子二つならんで啼ずなりにけり　吟龍

曙庵　肥後八代　在京　日向　美々津

背一ぱいのびて寝にけり花戻り　行脚　云界
鶯にめぐりあひけりひがし山　壱岐勝本　青也
山吹を折足もとや朝の蝶　鶴二
青柳の下をながるゝ小舟かな　桃水
挑灯の戻り少し花の宵　梅舟
若草の中を今年のながれ哉　文耕
蜂焼に入るや闇夜の花の中　東指
木の空や余寒を下す鳥の声　対馬
和らかな松のかげなり朧月　大和芝村　牛父
吉野　也亜

戸口まで鳩の来て啼霞み哉　都牛
ちる時はまてしばしなし山桜　虎遊
若草に家一ぱいの日和かな　橘枝
鶯や越る峠の真ひる時　梅古
春雨や寝ながらうたふ船頭唄　きぬ女
菜の花やこも僧入れぬ一在所　光山
見て戻るこゝろ淋しやあさ桜　湖月
我宿や寝ても覚ても花明り　丈翠
竹の根にちとづゝふえる菫かな　月峰

南都
河内守口
山城伏水
美津
嵯峨

夕暮やひとむらこめて啼蛙　百池
焚もつて行や爆竹の道あかり　金菜
居ならんだまた影ありて帰る雁　貨僕
余所の田へあまる月夜の柳かな　蘿閑
花山や近道よりは遠いみち　凡中
外の樹は暮一段や散さくら　梅通
撰摘にする背戸先の若菜哉　並隆
餌をやれば鶯去て仕舞ひけり　芹舎
見失ふ眼先へおりる雲雀かな　芳英

よき里といはるゝはしや庵の梅　几乙
咲花の混雑するに鍬遣ひ　若雅
野口から風呂敷とくや花の道　南渓
はね釣の針筋みえて柳ふく　十海
下駄はいて所廻する汐干哉　麦雄
腥い茶の辛抱もさくらかな　翁杖
蛙なく家となりけり須磨簾　草烏
夕雲の照るや余寒の峰の塔　喜楓
人過た花盛りなりあらし山　伶美

ひと谷はよき日更なり夕桜　酔露
ちる事をしれとや花に夕念仏　秋禾
柳から下へは雨のつたひけり　来元
我山で暮てもどるや初ざくら　遊蝶
炭竈のあとへたまるや雪解水　梅舎
饂飩屋の休む夜もあり朧月　孝平
降までは其まゝおくや花莚　よう女
桃咲やつれまつうちに一眠り　三保女
人声も曇る桜のさかり哉　とせ女

鶯をとくと立せて掃除哉　呉明
むつつりとした顔ぶりや孕鹿　初六
兎角して座の定らぬ桜哉　杜鷲
砂道を魚荷のはしる霞哉　杜蓼
凧ひとつこゝろだよりの山路哉　梅價
春中の空に日暮るひばり哉　完和
気の澄て寝られぬ花見戻り哉　祖郷
見巧者の付て見落す桜かな　榛堂
雨ほどは散てもおらず朝の花　夙也

杖くれた家で休ではつざくら　千崖
柴になるほどはのがれて山桜　蒼虬

追加

もらひ人に折せて置や梅の花　田子
春雨や晴て田に這ふ夕けぶり　如柳
大川をひとつあちらや揚雲雀　万年
浪際や打こむやうに飛つばめ　梨陌
菜の花や遣ひ水にも日のあたる　芝角

尾州ナゴヤ

あれ寺や菜畑に雪の消残り　李裳
鷹せがむからすしたゝか霞けり　楠圃
山坂やすべり歩行も花の奥　四渓
宿引に笠を渡せば春の月　野卵
戸はなれてみてはよりそふ梅の月　杉堂
土瓶茶のいたづら沸や花の本　淡如
霞もつ帆舟みえくる木の間哉　南溟
あらしもつ花や朝から盛なる　芦青
梅折て臆病直す野道かな　よし香

イセ山田
丹波舟木
ハリマ
石見
常陸小川

ひよいと出て何か飲けり蟇　天草大島子
手がらさうに濡て戻るや花の雨　下総沢　正焉
見勝手に膳ならべるや梅の花　葛西　雨什
乙鳥の水すつて行日暮哉　少年　松什
菊苗や泥手にこよりひねり居る　オク津軽黒石　浜吉
どの枝もをりにくけれど梅花　二本松　茹来
やす／＼と水の流るゝ夜の花　ハリマ魚崎　乙調
朧月夜が明たれば浪の音　文沙
明桶に灰とりためる余寒かな　カヾ金沢　居易
北洲

五一終オ

五一終ウ

京東洞院通

湖月堂
御摺物所
菊屋平兵衛

仏光寺上ル町

（裏表紙見返し）

（裏表紙）

【参考】

一、糸井本の五一丁裏に墨書あり。

にごりなき心写すや春の水　　暁月堂　黛山

風にあくきり戸にさわる柳かな　　仝

暁月堂主（朱陰印）　黛山(朱陽印)

二、糸井本の裏表紙見返しに墨書あり。

長谷川保造